

令和4年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人かすがい市民文化財団	
施 設 名	春日井市民会館	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	4,328	(千円)
	公 演 事 業	0 (千円)
	人 材 養 成 事 業	1,329 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	2,999 (千円)

(2) 令和4年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	参加者
1	若手音楽家支援事業	2022年12月23日	BULL、TrioPrimavera、ASTER、 JumbleQuartet、FUN、TrioEnchant	目標値	参加者 20
		交流アトリウム		実績値	121
2	演劇×自分史 カスガイ 創造プロジェクト	2023年1月14日	有門正太郎、岡本理沙、公募による 一般市民	目標値	参加者 120
		視聴覚ホール		実績値	203
3	舞台制作セミナー	2022年7月4・5日	有門正太郎、岡本理沙、春日井高校 演劇部員	目標値	100
		視聴覚ホール		実績値	26

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和4年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会	2022年4月2日、他	出演: ASTER、加藤恵利子、原田綾子、クローバー・トリオ、佐古健一、ルピナス、トリオビアンカ、他	目標値	2,200
		交流アトリウム		実績値	3,215
2	かすがい どこでもアート・ドア	2022年5月13日、他	出演: トリオ・ミシシッピ、他	目標値	4,500
		訪問介護 Masa 夢、他		実績値	4,358
3	生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》	2023年2月19日	出演: 高橋多佳子(ピアノ)、磯絵里子、中島麻(ヴァイオリン)、新倉ひとみ(チェロ)、吉田有紀子(ヴィオラ)、加藤雄太(コントラバス)	目標値	600
		春日井市民会館		実績値	644

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>当財団では6つのミッションのひとつに、「人材育成 -はぐくむ-」を掲げており、芸術家やアートマネジャーなど、将来この地域の芸術を担う人材を育てるため、教育機関や文化施設と連携・協力し、長期的視点に立った専門的人材の養成や職員の資質向上に努めている。また「普及啓発-ひろがる-」というミッションでは、芸術が市民の暮らしの中に浸透する環境づくりに取り組むことを謳っており、老若男女問わずバリアフリーで楽しむことができる事業を充実させ、芸術の裾野を広げることに努めている。</p> <p>【人材養成事業】「若手音楽家支援事業」は、コロナ禍により3年単位で実施すべきプログラムに遅れが生じたため、今年度は新規登録アーティストのオーディションを実施しなかった。代わりに「かすがい どこでもアート・ドア（アウトリーチ事業）」における地域の教育・福祉施設での派遣演奏や「昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会」等への出演機会を充実させた。「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」は、練習の回数や出演者同士の接触を最小限に抑えつつ、誰もが気軽に参加できるよう、セリフを覚えるというハードルを無くした「リーディング公演」とし、新規参加者12名を呼び込むことができた。「舞台制作セミナー」は、市内高校の吹奏楽部と演劇部を対象に、照明・音響・舞台技術・演出方法等の基礎知識を伝える機会として実施した。</p> <p>【普及啓発事業】「昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会」、「かすがい どこでもアート・ドア」、「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》」は、いずれも感染症対策を徹底しつつ、当初の予定通りに実施することができた。いずれの事業もコロナ禍を経てのリバウンドもあり、入場者・参加者数は前年度比で大幅に増加した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>【人材養成事業】「若手音楽家支援事業」では地元で活動する若いアーティストが地域の教育・福祉施設に訪問する「アート・ドア（アウトリーチ事業）」と、文化フォーラム春日井で開催する「ワンコイン・コンサート（インリーチ事業）」の両方を行うことで、地域密着型・地産地消型のアーティスト育成を推進した。「演劇×自分史カスガイ創造プロジェクト」では、現役舞台俳優としても活躍するプロの演出家を招聘し、市民等と協働でオリジナルの鑑賞型事業を創り上げることにより、参加者同士の交流の機会づくりや自己表現の研鑽に寄与した。「舞台制作セミナー」では、地元の高校生達が舞台の知識を学ぶことにより、芸術文化に対する興味関心を高め、「よりレベルの高い舞台公演をつくりたい」という目標に寄り添うことができた。</p> <p>【普及啓発事業】「昼コン&夜コン」は事業開始から19年目になり、地域に根付いた音楽会となっている。幅広い年齢層がプロの生演奏を気軽に聴くことができる機会となっており、事業の公共性が認められた結果、寄付金額45万円超えとなり、過去最高を更新した。「親子のためのはじめての音楽会」もコンサート鑑賞機会から遠ざかりがちな子育て世代でも周囲に気兼ねなく音楽を楽しむことができる機会として、需要が高くなっている。「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》」は、漫画のシーンや楽曲解説を入れたスライド投影を行い、「クラシック音楽に興味はあるが詳しくはない」という本公演がターゲットとする鑑賞者にもクラシック音楽の魅力を伝え、新たなファンの開拓を図るものとした。「かすがい どこでもアート・ドア」も、音楽の他、日本舞踊や落語など日常的に生の舞台に触れる機会が少ない伝統芸能を市民の身近に届け、申込の抽選倍率が3倍を超えるなど、需要に追いつけない状況である。コロナ禍で分断された「人と人との繋がり」を舞台芸術鑑賞・参加をきっかけに再び取り戻すべく、人材養成事業、普及啓発事業をともに地道に継続している。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【人材養成事業】「若手音楽家支援事業」の支援プログラムの一環として行う「ワンコイン・コンサート」は、これまでは3年間の支援プログラムの導入イベントとして位置づけていたが、修了イベントに置き換えることとし、今年度は第3期登録アーティストのFUNが出演した。会場も従来の視聴覚ホールから音響効果が最大限引き出せるように壁配置を施したギャラリーに移した。これにより演奏者と客席の距離が近くなり、一体感を持ったコンサートとなった。特に音楽面において演奏者の表現意図が聴衆に伝わりやすくなるという効果も生まれ、演奏者と聴衆両者から好評であった。集客は121名（満席）となり、目標を達成した。



2022.12.23 FUN のファンタスティック・クリスマス



2022.11.12 昼コン トリオピアノカ

「昼コン&夜コン」には平均180名が来場、また寄付金額が過去最高を更新するなど、本事業の継続と発展を願う市民の期待の高さを感じる結果となった。多くの回で春日井出身または在住のアーティストが出演し、地域密着型、地産地消型のコンサートが実現できたほか、「若手音楽家支援事業第3期、第4期登録アーティスト」全5団体が何らかの形で出演し、各団体の音楽家としての成長面で大きな意義があった。毎年「夜コン」への出演が恒例となっている井草聖二のコンサートは今回初めて有料化しての開催だったが、これまでの無料開催と遜色のない集客数を確保でき、目標を達成した。

「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」は第4弾となる今回は、計16回のワークショップに22名の参加（内12名は新規参加）があった。リーディング公演にも新しい観客が来場し、「演劇×自分史に参加してみたい」という市民が増えた。出演者及び観客のアンケート満足度は、観客が99.1%、出演者は100%で、いずれも目標を達成した。今回は障害を持つ親子が参加したことにより、社会の多様性を考える機会にもなった。また上演台本はアーカイブを目的に書籍化した。演劇は一過性のものになりがちであるが、自分史の従来の姿であった「書籍」に昇華することで、読み継がれていくものも基軸とした展開を今後検討していく。



2023.1.14 演劇×自分史リーディング公演「おかしな証」

「舞台制作セミナー」では、演劇版では春日井高校演劇部を対象に俳優・演出家の有門正太郎氏を講師に招き、



2022.7.4 演劇版 舞台制作セミナー

1日目は部員全員を対象に演劇の基礎、2日目は製作中の演劇について役者と演出家を対象に演出方法や演技指導を行った。吹奏楽部版では、それぞれの定期公演で応用できる演出方法とその作り方について、具体例を交えながら指導した。演劇版では財団スタッフが舞台道具の製作や音響照明効果のレクチャーを行ってきたが、今回はかねてより要望の多かった演技・演出についてのワークショップを外部から講師を招いて開催した。夏の大会に向けて、演劇の基本レクチャーから現在製作中の演劇への助言を行い、春日井高校は県大会突破と結果につなげることができた。吹奏楽版では演出例を操作映像と共に見学してもらうなど実践的な指導を行い、実際に照明・音響機材を操作する体験も行った。受講者は財団スタッフに積極的に質問しながら熱心に学んでいた。

【普及啓発事業】「昼コン&夜コン」、「かすがい どこでも アート・ドア」、「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》」のいずれも、来場者数（「アート・ドア」については訪問先数）やアンケート満足度においては、目標達成したが、有料公演で小中高生は500円で鑑賞ができる「学生の特券」の利用者数は、「のだめ音楽会」で目標人数の75%に留まり、あと一步のところまで目標値に届かなかった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【人材養成事業】「若手音楽家支援事業」第3期登録アーティストのうちFUNは今年度計画通りに「ワンコイン・コンサート」を開催できたが、同じ3期の2組（JumbleQuartet、TrioEnchant）は、R4年度での開催が調整できず、次年度に見送った。「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」は、リーディング公演に向けたワークショップが、計16回しかなくワークショップの講師・演出を務めた有門正太郎氏には、北九州からの度々の来訪も含め、かなりタイトスケジュールで負担をかけてしまったかもしれない。ただ、参加者にとっては短期間で集中して公演をつくり込む体験が、いい意味でとても刺激になった。「舞台制作セミナー」も部活の大会準備前の余裕がある時期を狙って開催し、参加者にとって有意義な時間をつくることができた。

【普及啓発事業】「昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会」は、会場となる交流アトリウム（空調管理がし辛い吹き抜けのエントランス空間）で、来場者が快適に過ごすことができるシーズン（春・秋）に開催している。19年続いてきた催しであるため、広報から公演当日までの流れはフォーマット化できており、運営スタッフにも過度な負担をかけずに回数を重ねてきている。「かすがい どこでも アート・ドア」は、派遣先の抽選の際に、申込団体の希望時期と派遣アーティストの年間の活動スパンにできるだけ偏りがでないように調整をしているが、秋の敬老会シーズン等に地域団体や福祉施設からの派遣希望が多くなる傾向があるため、毎週事業があるような繁忙期もある。ただ、今年度はコロナによる開催中止などはほとんどなく、計画通りに開催できた。「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》」は、全国で活躍する演奏者6名のスケジュールを調整し、市民会館の一般利用の妨げにならないような時期を見計らって開催することができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【人材養成事業】

「若手音楽家支援事業」

「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」

「舞台制作セミナー」

【普及啓発事業】

「昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会」

「かすがい どこでも アート・ドア」

「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会《室内楽版》」

いずれも、事業予算内で適切な予算執行ができた。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当財団の普及啓発事業の代名詞「昼コン&夜コン」は、音楽が市民の日常生活に浸透することを目指し、文化フォーラム春日井（1999年開館）のエントランス空間『交流アトリウム』を会場に行っている。3層吹抜けの交流アトリウムは3階の図書館からもステージが眺められる構造で、周囲がガラス張りであることから外を歩き交う人々からも中が垣間見える特殊な空間である。この施設特性を活かして、図書館や市役所に訪れた市民が、偶然に生の音楽に触れる出合いの場となるよう工夫している。この偶然の出合いこそが、芸術文化の裾野をひろげる上で重要であり、行き交う人々が一時足を止めて耳を傾ける姿は、地域の文化拠点の象徴的な一場面である。演奏者によっては動画撮影も可とし、SNSなどで拡散されることで事業の認知度も向上し、来場者も増加傾向にある。ギャラリーや図書館も併設しているという複合文化施設としてのメリットを活かすため、催事により人を集めるのではなく、人のいるところで催事を行うよう発想の転換をし、来館者の滞在時間が長くなるように、キッズコーナーや飲食スペースの開放などに日々取り組んでいる。また、令和2年度に交流アトリウムに200インチの大型LEDビジョンを新設し、通常時は財団主催事業の案内映像を放映し、「昼コン&夜コン」等のイベント時には、曲目の解説や演奏者の手元をリアルタイムで投影することにより、聴くだけでなく視覚的にも楽しく興味が深まるような事業づくりに活用している。

また、「昼コン&夜コン&親子のためのはじめての音楽会」以外にも、多くの事業を交流アトリウムで開催することにより、賑わいの視覚化を実現している。しかし、このようなオープンスペースでのコンサートは必然的に入場料を徴収できないため、継続・拡張するためには安定的な財源が必要となる。普及啓発事業は継続しないと意味がない。そのため、本事業では来場者から寄附金を募り、運営費の一部に充てている。R4年度の寄付総額は前年度比で1.6倍となり、市民が事業の理解者・支援者として、芸術の新しい芽をとともに育んでいる。このような関係性の変化から、従来のサービスの提供者と受益者という関係性から、ともに事業を支える「コモンな事業」へと変容していると言える。実際、コンサート終演後は観客自ら座席を片付け、ゆるやかに運営をサポートしてくれている。

今年度、新たな試みとして、文化フォーラム春日井内のギャラリーを本格的なコンサート会場として使用するための取り組みも行った。開館時に行われた音響測定報告書に、同ギャラリーについて「展示パネル（可動壁）をすべて格納した状態ではフラッターエコー現象が確認され、演奏利用には適さないが、展示パネルを何枚か利用した状態に置いてはこれらのフラッターエコーは軽減される」との記述を発見し、展示パネルをどう配置すると演奏に適した環境を創り出せるかを専門家による音響測定をいれて実験を行った。この結果を踏まえて実施した若手音楽家育成事業のワンコイン・コンサートでは、同ギャラリーがすぐれた音響特性を持つコンサート会場となりうることが実証された。これにより作品展示のような本来の用途以外で、施設の新たな活用の選択肢を広げることが出来た。

また、1999年の文化フォーラム春日井の開館以前より自分史の普及に力を入れてきた春日井市では、従来の「書く自分史」に取り組む人口が年々右肩下がりであった。自分史の可能性をみせるための様々な切り口の一環として「演劇」と融合させる「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」を実施することで、市民の人生の一場面を基にしたオムニバスストーリーを創作し、参加者が他の参加者のエピソードを演じることで、①共感や違いを認識して他者を理解すること、②出演者や鑑賞者が自らの来し方を振り返るという効果を生み出すことができた。春日井市ならではの演劇創作方法と、新たな自分史事業のあり方を模索していくための拠点として、この事業が機能した結果と言える。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

【人材養成事業】

「舞台制作セミナー」は、演劇版において市内の高校生達に夏の大会に向けて、基本レクチャーから現在製作中の演劇の同セミナーで行ったことも手伝ったのか、春日井高校は県大会突破という成果に繋げることができた。また、吹奏楽版では、市内8つの高校の内、7校に吹奏楽部があるという吹奏楽の盛んな土地柄、演出例を操作映像と共に見学してもらうなど、実践的な指導を行い、実際に照明・音響機材を操作する体験も行った。受講者は財団スタッフに積極的に質問しながら熱心に学んでおり、地域の高校生達が研鑽を積む場となっている。



2023.1.8 吹奏楽版 舞台制作セミナー

【普及啓発事業】

「かすがい どこでも アート・ドア」では、全体で過去最多の31か所に出向き、参加者数も前年度比1.6倍の4,358名となった。また、今年度より新たな取り組みとして、いくつかの小学校では体育館で全校生徒が鑑賞する「鑑賞会型」ではなく、音楽室などで30~40名程度の少人数でプロの音楽家の生演奏をより間近に見てもらえるような「授業型」の鑑賞を「スクール・アート・ドア」と銘打ち実施した。「授業型」のメリットとしては、すぐ目の前で演奏することにより音の伝わり方の迫力が違ったり、子ども達の反応がダイレクトに演奏者に伝わることで、進行の仕方をその場で工夫することもできるという相互作用が生まれる点である。演奏者の熱量がこもったその日限りのオリジナル授業を、生徒が普段過ごす教室という環境で直に届けることにより、劇場に行く機会が少ない生徒が、自然体のまま、音楽に触れられる機会を提供している。



2022.9.28 アート・ドア @ 神沢台小学校



2022.11.22 スクール・アート・ドア @ 西尾小学校

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

① タブレット端末によるアンケート調査の取り組み

「かすがい どこでも アート・ドア（スクール・アート・ドア）」を小学校で実施した後、1人1台支給されているタブレット端末を活用し、生徒児童に対してのWebアンケートを行い、子供たちの生の声を拾い上げ、より良いプログラムの検討のために活用している。アウトリーチ授業を受けた感想や講師（演奏者）に対する疑問や質問をこちらで集約し、必要に応じて後日演奏者からの返答をいただき、学校側に回答として戻す、という一連のアフターフォローを徹底し、事業が一過性で終わらないように工夫している。また、アンケート調査結果から生徒の文化芸術に対する興味・関心度や傾向を把握することで、演奏家が次回のアウトリーチ事業を実施する上での技術研鑽やプログラムの組み立てのために活用している。

② 自分史事業の活性化

「演劇×自分史 カスガイ創造プロジェクト」において、第4弾をリーディング公演としたことが、参加者のハードルを下げ、新規参加者が12名に増加し、プロジェクトの新陳代謝が図られた。新旧あわせて22名の老若男女がこの事業で作品をつくるという目標に向かってワークショップを重ねる中で世代間交流が生まれ、出演者はもちろん、リーディング公演の鑑賞者も自分史事業と演劇の親和性の高さを実感する機会となった。

このプロジェクトの成功を受けて、専属のプロデューサーを配置し、自分史事業全体のリニューアルにつながり、財団事業のオリジナリティを象徴する核として自分史を再定義している。自分史事業の親和性の高さは、音楽、舞踊、美術にも波及する高い可能性を秘めており、財団の事業展開に大きく影響を与えている。

③ 安定的な財源確保と市民の支援

春日井市文化振興基本条例には、財団の責務が明文化されており、文化政策を体現する専門集団として位置づけられている。市補助金の減少もなく、近年は市から財団への事業移管による人員増や事業費増が認められ、安定的な財源が確保できている。

特に「昼コン&夜コン」は、新型コロナウイルスにより公演回数が半分程度となったが、事業に対する寄附金は、451,201円で過去最高額となった。来場者1名にかかる市補助金（依存財源）は36円となり、目安としている500円/名を大きく下回り、継続的に良好な事業運営ができています。コロナ禍を経て、文化芸術の必要性が叫ばれる中、多くの市民に事業の公共性が認められたと感じています。